

中国で終戦後の逃亡生活を本に



豊田市双美町の横山憲子さん(モセ)が、中国で過ごした幼少期の戦争体験を中心に自身の半生を描いた「私たちの大陸逃亡記」(風媒社)を出版した。十年ほどかけて当時の知人から話を聞き集めて、戦後七十年の節目にまとめた。(岸友里)

戦後70年

横山さんは一九四〇書では八年後に帰国す(昭和十五)年に、中るまで、他の日本人家族と協力しながら送って生まれた。本土ではた日々を中心につづつ次第に激しくなっていた。

逃亡生活を、横山さんご受けすることなく幸せんは「声を殺して泣きな家庭に育った。しながら大人に付いていし、四歳で迎えた終戦った」と振り返る。子を機に一転。広大な砂どもの泣き声は命取りになるため、乳飲み子を抱えた母親たちは授乳時に、自分の胸にわが子を押しつけたという。横山さんの母も例外でなく、一歳の妹を亡くしている。

横山さんは、自身が子育ての最中に、知人から妹の死の真実を聞かされ「三日三晩涙が止まらなかった」。帰国後も苦難続きた

「私たちの大陸逃亡記」を出版した横山さん(豊田市美里の「おとりえシトロエン」で)

豊田の横山さん「周囲の気遣いに感謝」

った。一家ばらばらとなり、横山さんは母の実家があつた熊本県で親戚の家に預けられた。高校進学まで続いた肩身の狭い生活での苦勞なども記している。

現在は主に、裁判所や警察署などで、事件を起こしてしまった中国人の通訳の仕事を行う横山さん。「当時のつらい経験が今に生きている」と語る。

子育てを終えた四十年代半ばから中国語を学び直した。「逃亡生活中などのつらい時に自分を救ってくれたのは、周りの人の気遣いのひと言だった。異国の地で心細い思いをしている人にとって、いかに話しやすい環境をつくれるかが通訳士の仕事の一つ。これからも弱い立場の人の声に耳を傾けられる人でありたい」と話した。

四六判、百六十九頁。千二百円(税抜き)。風媒社 052(331)0008